

独占スクープ

惨劇から5年半、米国FBIに指名手配された
凶悪犯と宮沢さん一家のあいだに浮かんだ点と線を追う!

世田谷一家殺人事件



本誌が入手した衝撃証言

この男が「犯人」だ!

'00年12月、東京都世田谷区で宮沢みきおさん一家4人が惨殺される事件が発生。外国人犯罪グループの犯行が有力視されるなか、本誌は米国FBIが逮捕した韓国人強盗の「仲間が日本で一家皆殺しの強盗をやった…」という告白を独占入手した。犯行グループの首謀者の名前はA・W。スクープ情報をもとに事件の真相を決る!

事件当時日本にいた犯人との意外な接点

米国の捜査当局が警視庁にもたらしたという数枚の写真がある。休暇で故郷に帰ってくる米軍兵士——そんなふうにも見える男性が写るその一枚を、今回本誌は入手した。男の名前は「A・W」(仮名)。現在も未解決である「世田谷一家殺人事件」の犯人グループの一人、いや首謀者と目される男である。

事件発生から5年半。ここきてA・Wの名前が急浮上したのは、現在、米国連邦捜査局(FBI)に強盗容疑で身柄を拘束されている韓国人の供述がもとだった。

「日本で一家皆殺しの強盗事件を起こした犯人を知っていると、俺の仲間が話すのを聞いた」

この韓国人が名前を挙げたのがA・Wだ

宮沢一家4人は埼玉県新座市の墓園に眠っている

った。だが供述が進むにつれ、A・Wは犯人を知っている」だけではないことが明らかになったという。FBI関係者が語る。

「被害者の宮沢みきお。宅に侵入して一家4人を殺害した実行犯に、重要な情報を提供して事実上犯行を指示していたのがA・Wだったと、韓国人容疑者がその後の供述で明らかにしたのです」

A・Wとはいったい何者なのか。じつは昨年来、米国で富裕層を狙った武装強盗事件が多発し、FBIが捜査に当たっていた。そのなかで武装強盗団の一味として逮捕されたのがこの韓国人容疑者。A・Wもその一員としてある武装銀行強盗事件にかかわった容疑でFBIから指名手配されているのだ。FBI関係者が続ける。

「A・Wは身柄確保につながるような情報提供があれば5千ドルの懸賞金が出されることになっている凶悪犯です。我々は世田谷一家殺人事件が日本で重要な未解決事件として捜査が進められていることは知らなかったが、日本でA・Wがそんな強盗事件を起こしているならば、何か指紋や証拠でも出てこないかと考えて、日本の捜査当局に連絡をとったのです。我々からも日本の警視庁にA・Wの写真を数枚提供する一方、FBI関係者が捜査本部を訪れ、犯人の遺留品なども確認しています」

本誌が今回掲載したのは、東京・成城署に置かれている世田谷一家殺人事件の捜査本部に提供されたというその一枚である。さらに本誌が取材を進めると、A・Wと世田谷一家殺人事件を結びつける事実が次々と浮かび上がってきた。

「A・Wは米国籍を持つ米国人だが、日本人女性と結婚し、子供ももうけている。東京で妻とともに10年間を過ごしており、世田谷一家殺人事件が起きた00年にも日本に滞在していたことが確認されている」(別FBI関係者)

もちろん事件当時、日本に住んでいただけでは何の証明にもならない。だが宮沢とA・Wにはある「接点」が存在した。

「A・Wは強盗事件を起こす前に、米国に本社があるヘッドハンティング会社の東京支社で勤務していたようだ。じつは、このヘッドハンティング会社に宮沢みきおが転職希望者として登録していたという情報がある。当然、A・Wは宮沢の年収や家族構成、自宅住所などの詳細な個人情報を知りうる立場にいたわけだ」(前出・FBI関係者)

前述のとおり、A・Wは現在米国で富裕層を狙う武装強盗団の一味として指名手配されている。その手口は、事前に高額所得者や資産家の名前を、そうした情報を持つ企業の協力者から得た情報でリストアップしたうえで自宅襲撃に及ぶものだという。世田谷一家殺人事件の取材を続ける全国紙社会部記者がこう話す。

「現場の荒らされ方から見て犯人たちは宮沢が自宅に多額の現金を持っていたと考えていたようだ。実際、宮沢は高給で知られる外資系コンサルティング会社の幹部で、しかも自宅は隣接する公園の拡張にもなっている世田谷区に買収される予定だった。犯人たちが宮沢一家の裕福な経済状態を知り犯行に及んだ可能性は高い」

また、事件当時我々の背筋を凍らせた、日本では類を見ない犯人グループの残酷さと冷血ぶりや、一家4人の殺害を終えた現場で冷蔵庫を物色し、アイスクリームや果物を食べ散らかし、宮沢のパソコンを使ってネット経由で誰かと通信していたという奇怪な行動も、犯人たちが武装強盗団とつながりのある凶悪な外国人グループだったとすれば納得がいく。そして、宮沢一家の情報を入手し、狙いを定めた首謀者がA・Wだった。韓国人容疑者がFBIに供述したのは、まさにそのような内容を

持つものだった。

「A・Wは周囲に、世田谷一家殺人事件の実行犯たちは事件の翌日には日本を離れたと語っていたようだ。だから彼らが日本の捜査当局に逮捕されることはありえない。当然、A・Wは彼らの出国先も知っているはずだ。FBIはFBIとしてA・Wの逮捕に全力を挙げていますが、もし逮捕できれば世田谷一家殺人事件の全容が解明されることは間違いのない。日本の捜査当局への協力はもちろん惜しまないつもりです」(前出・FBI関係者)

今回、本誌は宮沢みきおの父親・良行氏にA・Wの写真を見せた。

「(みきお)からヘッドハンティングの話がきていることは聞いたことはあります。『コンサルティング関係の仕事にはよくヘッドハンティングがある』と言ってましたね。この(A・Wに関する)話は初めて聞きました。最近外国人犯罪グループの犯行が多いので、もしかしたらそういったグループが(世田谷での犯行を)やったのかなとも思



捜査当局から現場保存の要請があり、24時間パトカーで見張り番をしている

宮沢みきおさんの父は「もしかしたらそういったグループが…」

っています。警察からは捜査の進展などの報告はありません。先方が事情を聞きたいときに連絡がくるだけです」

今回、本誌の取材で新たに浮上したA・Wとその周辺の武装強盗団について、元警視庁警察官のジャーナリスト・黒木昭雄氏は次のように分析する。

「仮にFLASHの取材とありFBIから警視庁にこの人物の情報や写真が渡っているとしたら、情報が洩れないように極秘にA・Wを知る関係者などにピンポイントの捜査をしていると考えられます」

事件現場となった宮沢さん宅は、捜査当局から現場保存の要請があり、今も当時のまま残されている。放火や落書きなどを防ぐため、24時間ハトカーが張りついているが、都立公園の予定地に組み込まれているため

すでに周囲の家はほとんどが立ち退き、家の周囲は雑草に覆われ、事件発生から流れの長さを感じさせる。

「今年の春に新任の捜査員が聞き込みに来たけれど、前の捜査員と同じことを聞くから「データを共有していないのか」と聞いたら引き継ぎが完全にできていないのだ」と言い訳していたよ。(A・Wの写真を見てその写真を見せられたりしたことはないなあ) (近くの商店主)

今回、本誌が明らかにできたのは、A・Wとその一味のほんの一部ではない。だが宮沢さん一家を襲った犯人グループの首謀者と目される男が存在し、その顔写真が日本の捜査当局の手に渡っていることすれば、宮沢さん一家の無念を晴らせる日は、けっして遠くはないはずだ。



世田谷一家殺人事件
侵入者たちの告白

「疑惑の書」と糾弾された著者が徹底反論90分!

本誌だけに

発売2週間で25万部の売れ行きも当然か。世田谷一家殺人事件 侵入者たちの告白(章友社刊)は、事件発生から5年半、迷宮入りも囁かれる凶悪事件の「実行犯」を「決定的証拠をもとに」特定したというのだから。だが、この「衝撃スクープ」に『週刊朝日』が「疑惑のベストセラー」と囁みつけた。はたしてその真相は? 著者が本誌の独占取材に初めてすべてを語った。

「鬼の言葉。それが取材の原点だった。01年2月夜、当時、週刊誌記者だった著者の齊藤寛氏は、殺害された宮沢みきお氏の実家を訪ね、母親から話を聞いた。母親の魂から直接絞り出されたような言葉。に衝撃を受けた齊藤氏は、世田谷一家殺人事件の取材に本腰を入れる決心をする」。

ところが、『週刊朝日』(7月21日号)の記事では、みきおの父である宮沢良行氏に取材し、齊藤氏が自宅に来たのは「本が出版される直前の6月13日」で、「彼とそれまでお話しした記憶がない」、「家内に聞いたら、こんな会話をした記憶が全然ない」とう」との良行氏の言葉を引用している。

いわば取材の大前提となった母親の告白そのものがなかったのではないかと、疑問符を突きつけているのだ。遺族も首を傾げる。と『週刊朝日』は大きくうったった。

「クリミナル・グループ」これも同書を貫く重要なキーワードだ。アジア系の留学生などによる新しい犯罪集団のことを指す。同書では大阪・曽根崎風俗嬢殺害事件や大分産産家夫妻殺害事件の犯人も「クリミナル・グループ」の一員だったと書いている。だが、『週刊朝日』は、事件の描写がそれぞれの冒頭陳述と異なると指摘、「大阪、大分事件の描写はハッキリ言ってメチャクチャ

ヤ」との捜査関係者の言葉まで引用して疑問を呈した。齊藤氏が世田谷事件も同グループの韓国人、中国人の3人の犯行であると同書で記したことに対して、殺害状況の記述が警察発表と異なると指摘した。『週刊朝日』の記事は、明らかに齊藤氏の著書の「信憑性」に疑問を投げかけるものだ。真相はどうなのか。以下は著者・齊藤氏による「最初で最後の反論である。齊藤氏は最初、口が重かった。①

大ベストセラーの 「信憑性」が問われている



書店でも話題の同書。草思社では『週刊朝日』に抗議文を送るといふ

のは8時過ぎ。星がきれいな寒い晩だった。家にはブザーがなくてドアをノックしたらお母さんが出てきた。あの夜はいつも取材に対応している良行はいなかった。お母さんが取材に応じるのは初めてだから「独占告白」というタイトルが頭に浮かんだ。それは本にも書いたとおりだ」

しかし、宮沢良行氏は否定している。「お母さんに会ったあの夜、じつは良行とも電話で話している。その後、本が出る

場」した人かどうかはわからない。どれだけ情報を持っているのか。だいたい冒険がそのまますただなんて聞いたことがない。反論のしようもないが、取材に確信を持っていると言えない」

世田谷事件の殺害の順番なども警察発表とは異なるという指摘もある。

「警察発表と取材内容が違ふということを知っているし、往々にしてあることだ。その場合、僕は迷わず取材の結果を取る。発表よりも自分の取材を信じるのが取材者ではないか」

「衝撃的スクープ」が、「疑惑のベストセラー」か。齊藤氏の反論を聞いても判定はなお難しい。双方の主張に確実な「根拠」となる材料がないからだ。だが、誰の目にも明らかな唯一の判定材料がある。同書にはわざわざ一章を割いて「実行犯の「写真」を入手した経緯が書かれているのだ。写真こそ動かぬ証拠ではないか。

「写真は今も持っているのか?」

「一部は警察に渡したが持っている」

その写真が「疑惑」を晴らす意味でも決定的な証拠になる。本誌に提供してもらえないだろうか。

「協力してくれた相手に迷惑がかかる。身の安全の問題もある」

では、写真を見せてもらうだけでもいい。それなら迷惑はかららないはずだ。

「その話はたしかに受け取った。だが即答はできない。少し時間が欲しい」

こうしたやり取りを繰り返した結果、取材の翌々日、もう一度会う確約を取った。だが前日になって先方からかかってきたのはキャンセルの電話だった。「急用ができた。理由は言えない」。それがキャンセルの「理由」だった。

